後若年性歯周炎の一治療例

東京歯科大学保存第二講座

○齋藤 淳、山田 了

Treatment of post-juvenile periodontitis: A case report

Department of Periodontics, Tokyo Dental College

○Atsushi Saito and Satoru Yamada

キーワード：若年性歯周炎、局所薬物療法、GTR
法

1 はじめに

若年性歯周炎は思春期前後に発症するが、20歳代後半から30歳代頃まで診断および治療が行われないケースが多く認められる。今回、臨床で遭遇する頻度が比較的高い後若年性歯周炎の一症例を通して、現在選択できるようになった治療法の応用について報告する。

2 初診（1989.11）

患者：29歳 女性

主訴：下顎前歯部の歯肉の腫脹

既往歴：特記事項なし

現病歴 1987年頃、下顎前歯部歯肉腫脹を自覚するも妊娠のため放置。1989年5月より開業医にて簡単な歯科治療を受け、本学保存科に紹介来院

3 診査、検査所見

1) 初診時歯周診査

上	BOP	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	PD	7	8	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
下	MO	1	1	1	0	1	1	2	0	0	0	0	1	1	3																
	PD	4	4	7	4	4	4	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
		7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7																
	PD	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
	MO	1	1	0	2	3	3	3	3	2	1	0	0	0	0																
	PD	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
下	BOP	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30

2) X線所見

上下顎切歯部、上下顎第一大臼歯を中心に歯槽骨吸収が著しい。

3) 細菌検査

培養法では *P. gingivalis*, *P. intermedia* などが検出されたものの、*A. actinomycetemcomitans* はほとんど検出されなかった。蛍光抗体法では、*A. actinomycetemcomitans* は弱陽性。これらの菌に対して血清 IgG 抗体価は上昇していた。

4 診断 後若年性歯周炎

5 治療計画

1) TBIを行いプラークコントロールを徹底し、スケーリング、ルートプレーニングによる炎症の抑制。化学的なプラークコントロールも応用し、歯周病関連性菌の可及的な排除に努める。

2) 保存不可能と診断した歯の抜去後、歯周治療義歯の装着と当面の咬合の確保。

3) 再評価により、歯周外科の適応部位の決定と術式の選択。

4) 歯周外科後の再評価を経て、最終補綴を行う。

6 治療経過

1) 初期治療（1989.11～）

プラークコントロールは数回の指導でPCR20%以下になった。主訴の下顎前歯部は歯槽骨の吸収が根端まで及んでいたため、4